

にお金を使わない」と答えており、その時点の節約ムードがうかがえる。

しかしその一方で、家計の状況は少しずつ好転しているようで、家計に「余裕がある」と答える人が、五年から五三年にかけて一七%から二五%へと増え、「赤字」の人が二一%から一六%へと減っている(表3—3)。

そして、生活のさまざまな要素を全体としてとらえた生活の満足感、この数年、満足派が少しずつ増える傾向にある(表3—4)。

「満足」と「まあ満足」の人を合すると、四八年の五五%が五三年の七〇%へと増えている。全国民の暮らしの満足感でも同じような傾向が表われており、満足派は四九年の五四%が五三年の六四%へと増え、オイルショック以前の四五年とほぼ同じ割合に戻っている(表3—4)。

五三年の調査で「生活の満足感」と「生活の心配ごと」の関係をみると(図表は省略)、生活に不満をもっている人の間では、「住宅」「子供の教育」「仕事・職場」「失業・収入減」への不満が平均より多い。これをライフステージ(人の生涯の段階)別にみると、学生と独身期の人に「仕事・職場」の心配、第一子就学前の親に「住宅」、第

一子就学前と小中学生の親に「子供の教育」、第一子独立した親に「失業・収入減」、老齢期の人に「老後・病氣」の心配が、平均より多く現われている。「インフレ・物価高」は、生活の満足派・不満派を問わず、各ライフステージを問わず、ほぼ一様に心配事としてあげられている。

市民の生活環境と意識

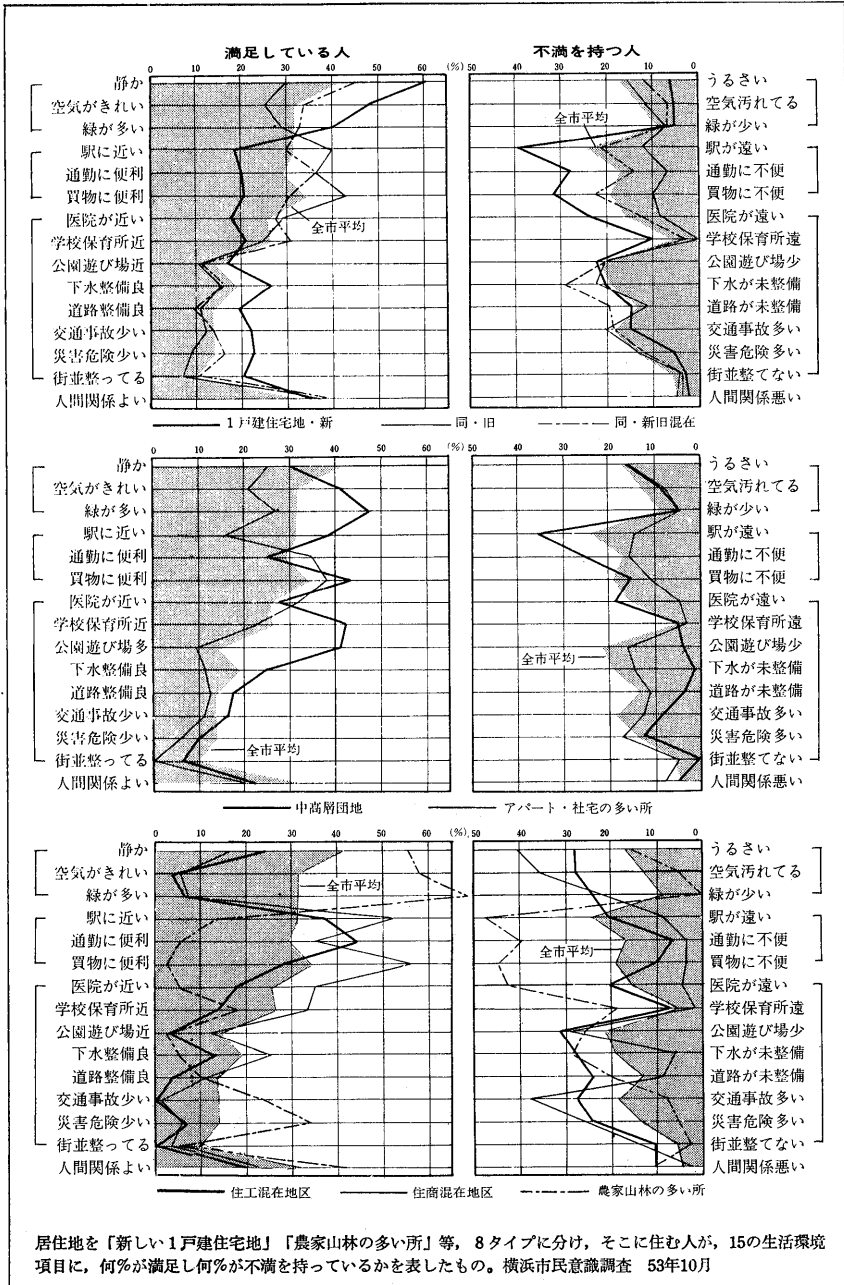
この十数年で百万人以上の人口が増えた横浜では、いまの所に住むようになって九年以内という住民が五四%もいて、新住民がいまでも多い。だが、いまの所へ横浜市内から移ってきた市民の割合は、少しずつ増えてきている(表は省略)。四八年には前住地が横浜市内であった住民は五五%だったのが、五三年には六一%に増えているのだ。

また、これからずっといまの所に住み続けるつもりのある市民は、「たぶん」という人も含めて六八%である。

●居住地で異なる生活環境の満足・不満

新住民の定住化は進みつつあるが、市民はいま住んでい

図3-5 生活環境への満足と不満——居住地の性格別にみる



る所の環境をどのようにみているのだろうか。市内の居住地を八つのタイプに分けて、一五の生活環境項目について、市民の満足感と不満感をみると、図3—5のようになる。

どの居住地でも「静か」「空気がきれい」「緑が多い」などの自然環境と、「駅に近い」「通勤・買物に便利」などの便利さについての満足感が、かなり対照的な傾向を示している。

一戸建住宅地では、新しい住宅地で自然環境への満足感が大きくて便利さへの満足感が小さいが、ふるい住宅地では逆に、自然環境への満足感が小さくて便利さへの満足感が大きく、新旧住宅地で大きな対照をみせている。新旧混在の住宅地ではその中間で、やや旧住宅地に近い傾向だ。

住工混在地区と住商混在地区は、旧住宅地の満足感をもっと極端にしたような傾向で、自然環境への満足感是非常に小さく、便利さへの満足感はかなり大きい。一方、農家や山林の多い所は新住宅地の傾向をもっと大きくした形で、自然環境への満足感が非常に大きくて便利さへの満足感ばかりきわめて小さい。

アパートや社宅の多い所は旧住宅地にやや似たかたち。中高層団地では自然環境・便利さどちらの満足感も、他と

比べて高からず低からず、中間的な位置にある。全市平均ではこれらが均等化されて、自然環境も便利さも同じような満足感となっている。

他の生活環境項目の満足不満には居住地ごとにそれほど対照的な差はみられないが、やはり一戸建住宅地では「旧」よりも「新」のほうが満足感が大きく、住商混在地区や住工混在地区は、項目によって差があるが、概して不満が他より大きい。中高層団地はかなり満足感が大きいほうだ。

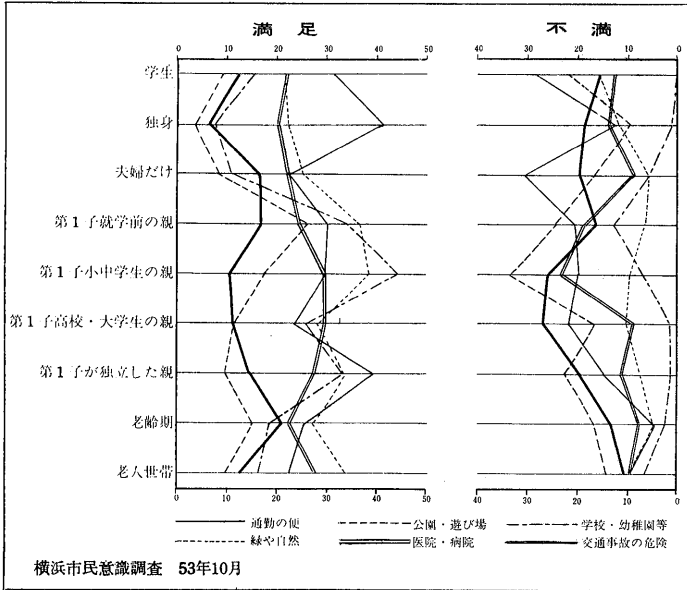
自然環境や便利さの項目は、満足感、不満感どちらも答えた人の率が高くて、市民の関心は大きい。しかしその他の生活環境項目は満足も不満も少い。中でも「街並み」はどの居住地でも満足が小さいばかりか不満も決ったように低い。街並みには市民の関心は薄いといえる。

● 幼児の遊び場に満足、小中学生の公園に不満

この一五の生活環境項目から六つの項目を抜きだして、ライフステージ別に満足と不満を対比させてみると(図3—6)、どの項目もちがったパターンで変化するのが興味深い。

「公園・遊び場」には第一子就学前の親がいちばん満足し

図3—6 ライフステージ別に見た生活環境への満足と不満



ており、第一子小中学生の親がいちばん不満をもっている。幼児向きの遊び場はあっても小中学生が遊べる公園は不足しているということであろう。「学校・幼稚園・保育園」

は逆に、第一子就学前の親にいちばん不満が多くて、小学生の親にいちばん満足が大きい。

「医院の近さ」には、満足感各ステージにあまり差がないのに、不満は第一子就学前の親や小中学生の親に大きい。「緑」は逆に、不満が各ステージで差がなく、満足感が第一子就学前の親や小中学生の親に大きい。

「交通事故の危険」と「通勤の便」は、満足が多いステージには不満派が少なく、不満派が多いステージには満足派が少ないというように、満足・不満が併行してステージごとに増減するパターンだ。

●住みよい所は働く人には不便

市民が生活環境を大づかみに「良い」「悪い」と評価するとき、生活環境の何が良ければ全体として「良い」と感じるのか。さきの一五の生活環境項目とこの「良い・悪い」の評価をクロスして、そのうち傾向のはっきり出ている六項目を示したのが図3—7である。

一口に言って、「老人や身障者」にとって「良い所」だと感じている人は、「静か」「空気がきれい」「自然に恵まれている」といった自然的環境に大きな満足を示し、「駅

図3—7 生活環境評価の要因

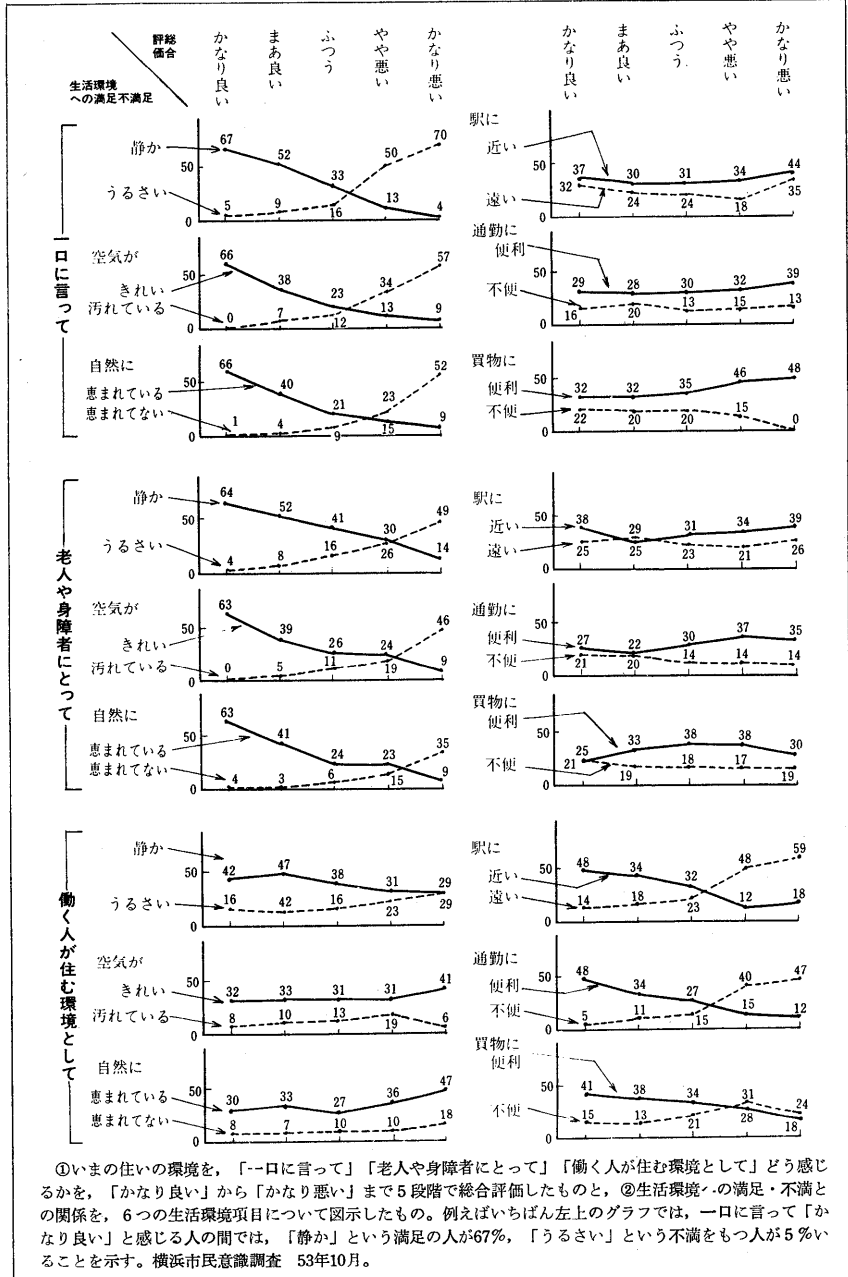
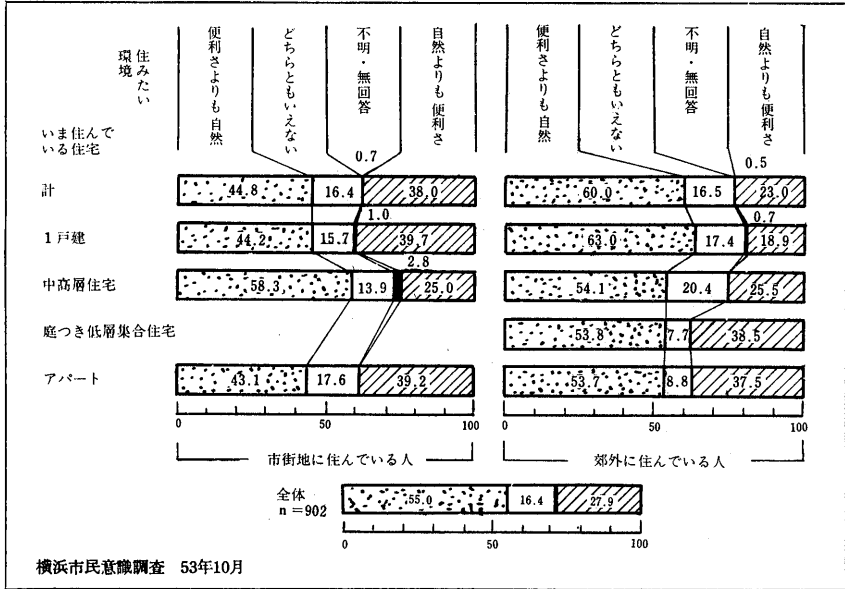


図3—8 どういう所に住みたいか——いま住んでいる所との関係

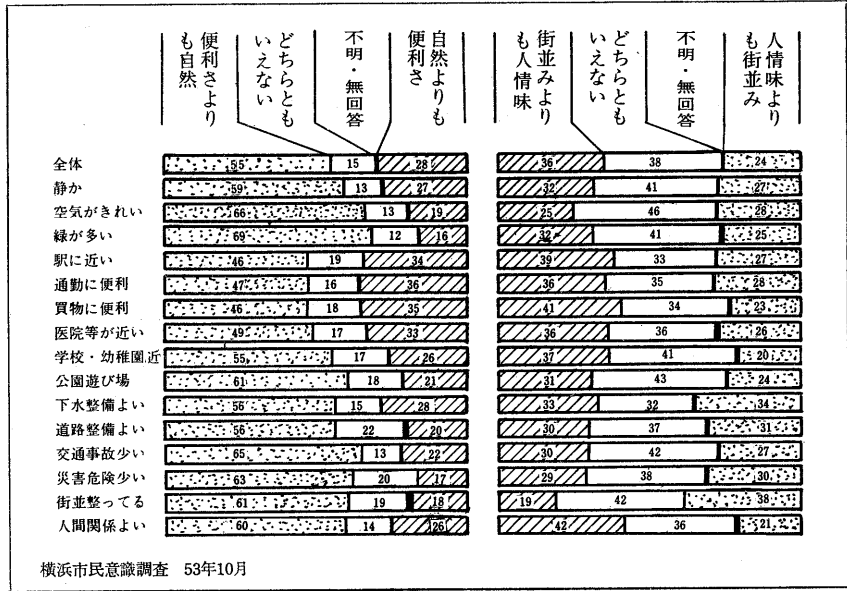


●住いの価値観反映する居住地選択

このように、自然環境のよい所は不便であり、便利な所は自然環境が悪いといった矛盾が都市生活にはある。実際に人々はこのように矛盾する条件の中で住いを決めているのだろうか。便利さか自然のどちらを選ぶかという問いかけへの回答と現実に住んでいる住いの関係を見ると(図3—8)、いま郊外に住んでいる人は当然ながら「自然さより自然」を選ぶ気持を持っている人が多い。いま市街地に住んでいる人は、「自然を」選ぶ人のほうが絶対値では

に近い」「通勤・買物に便利」といった便利さにはあまり満足していない(グラフは省略したが、「子供にとって」の評価でも同様の傾向となっている)。しかし、「働く人が住む環境として」、「よい所」だと感じている人の、自然的環境への満足感は概して低く、むしろ便利さへの満足感が大きい。結局、一般に「よい住宅地」といわれている所は、働く人以外にとって住みよい所、多少不便でも自然的環境のよい所であり、そういう所は働く人には不便な所だがガマンして「家族にとってよい所」に住んでいる——といえそうだ。

図3—9 いまの居住地の満足度別にみた住みたい環境



多いが、「便利さを」という人も全市平均より多くなってきている。現実の住いは居住地選択の価値観をある程度反映している。

さて図3—9は、「便利さか自然か」と「街並みか人情味か」への回答といまの居住環境への満足感との関係を示したものである。詳しい説明は省くが、一つ興味深いことに気づく。それは、左側のグラフの「自然よりも便利さ」を選んだ人の居住環境への満足感と、右側のグラフで「街並みよりも人情味」を選んだ人の居住環境への満足感が、左右対象で形が似ているのである（例えば「通勤に便利」という満足感をもった人のうち三五・三%が左で「自然よりも便利さ」を選び、右でも三五・七%が「街並みよりも人情味」を選んでいる）。

便利さか自然かで「便利さ」を選んだ人が街並みか人情味かでも「人情味」を選んだとは必ずしもいえないが、「便利で人情味のある所」を好む人が少数派ではあるが存在するといってもよいのではなからうか。「不便だが環境のよい所」を好む人が大勢を占める中で少数派だ。